

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720220

研究課題名（和文） 室町幕府の外交儀礼と唐物文化に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Basic study on diplomatic protocol and “Chinese” Things Culture of the Muromachi Shogunate

研究代表者

橋本 雄 (HASHIMOTO, Yu)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50416559

研究成果の概要（和文）：

本研究が課題としてきたのは、室町幕府の外交儀礼と唐物文化に関する基礎的な蒐集と検討とである。研究の成果は、10本以上の学術論文のほか、2冊の一般書に結実し、その成果を広く江湖に問うことができたと考える。いずれも、狭義の外交史に閉じこもるものではなく、表象文化論や政治史、流通経済史などへの架橋を積極的に試みた論著である。

研究課題の前者（外交儀礼論）について言えば、室町殿が行なった外交儀礼を、関連史料の厳密な史料批判や、朝鮮・琉球などとの比較検討をもとに厳密に検討・復元した。

また、研究課題の後者（唐物の政治文化論）に関しては、生糸や絹織物、書画典籍といった文献史料中の唐物を蒐集したほか、それぞれのもつ文化的表象性を剔抉していった。

以上により、外交史と国内史とを単に短絡させるのでも、またまったく異質のものとして峻別するのでもなく、両者の接点を冷静に見通す縁が得られたといえるだろう。

研究成果の概要（英文）：

The main problem of this research is fundamental collection and inspections on a historical report and material about the culture of "Chinese" things and diplomatic protocol of the Muromachi shogunate. About 10 articles were published in the professional journals and also a few enlightenment books for public were issued. All essays were written by composite view of culture and representation, political history, economic history, and so on.

I think that this research on both diplomatic protocol and “Chinese” things in Muromachi Japan succeeded in making a small bridge which connects diplomatic history and domestic one.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2010年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2011年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2012年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中華皇帝、唐物、贈与、外交儀礼(賓礼)、室町幕府、明朝、東アジア

1. 研究開始当初の背景

室町時代の将軍権力が足利義満の段階で頂点に達し、天皇を凌駕していたことは周知の通りである。とりわけ、義満が天皇の位を「篡奪」し、息子の義嗣を天皇としようとしていたと見る佐藤進一氏や今谷明氏は、「皇位篡奪」後の権威付けを、明皇帝の「日本国王」冊封に求めた。こうした見方は、対外関係史を国内政治史に本格的に接続させようとした点で高く評価できるが、その接続のさせ方が短絡的だという難点も指摘せざるをえない。ただし、義満が「皇位篡奪」を計画していたとする説については、2013年春現在、否定的見解の方が圧倒的に優勢である（研究代表者＝橋本もその立場に立ってきた）。

また一方で、田中健夫氏らの対外関係史研究者により、義満以下の室町殿が冊封されたことに対しては幕府周辺でも批判が強く、そのためもあって歴代室町殿は国内向けに「日本国王」号を自称したことはないこと、そして室町幕府権力は内向け（将軍権力）と外向け（「国王」政権）の二重構造を採っていたと見るべきことが強調されてきた。この指摘はおおむね正しいと考えるが、「二重構造」と寸断して満足するのではなく、やはり「内向け」と「外向け」の両者の回路や接点こそを明らかにせねば、上記の佐藤・今谷説の検証や批判は不可能であろうと思われる（拙稿「室町幕府外交は王権論といかに関わるのか？」2000年）。

また、足利義満が前代以来、手元に集積してきた美術品や、さかんに行なった日明貿易のなかで獲得したものを含む「唐物（カマロ）」（中国・朝鮮・南蛮からの舶来品）が、どのような政治的イメージを振りまっていたのかという問題も重要である。これについては、もっぱら美術史研究の領分であった。ところが、近年の当該研究を見てみると、文献史学でも近年批判が相次いでいる上記の今谷明説（「室町の王権」論、つまり「室町殿＝日本国王」論）を継受して、唐物や唐絵を冊封関係（「日本国王」冊封）と直結させて理解してしまう傾向が散見される。唐物のとらえ方についても、根本的な再考が必要となってきたのである。

2. 研究の目的

そこで本研究課題では、本来「外」から規定されているはずの外交儀礼（冊封儀礼など）が日本国「内」ではどのような変容を見せていたのか、「外」から来た唐物（カマロ；高級舶来品）が「内」においてどのような表象的価値を有していたのか、という問題を考究する。それにより、「内」と「外」とをつなぎ、あるいは比較対照し、「国内史」と「対

外関係史」とを等身大の形でつなげていくことを目的とする。

そのために、本研究課題では、二つの柱（（1）・（2））を設定する。

（1）比較外交儀礼論

これまで村井章介氏らによって注目されてきたように、義満が「衆人環視のもと」冊封儀礼を挙行し、冊封の事実をアピールしたことが推察されている。ところが、その典拠史料（『満濟准后日記』）には、その冊封儀礼に誰が参列し、どのように国内に受け止められたかについての記載はなく、どの程度アピールされたかまでは分らなかった。そこで申請者は、「宋朝僧捧返牒記」（宮内庁書陵部蔵）を用い、義満の冊封儀礼の実態に初めて迫った（拙稿「室町日本の対外観」2008年）。それによれば、参列者は日頃から義満に昵懇な公家や僧侶など30名ほどであり、守護大名や京都五山僧すら含まない、ごく内輪のグループであった。そして、さらに重要なことに、義満が北山殿で行なった冊封儀礼のあり方は、大枠が明側の賓礼規定（「蕃国迎詔儀」『大明集礼』等）に則っているものの、装束や拜礼回数、会場の造作などではかなりの逸脱が見られた。つまり、義満は単純素朴に明皇帝の「臣下」に成ったわけではなく、自分なりにアレンジして、明側の規定を逸脱して冊封儀礼を挙行し、尊大な態度を採っていたのである。

このように、冊封儀礼のあり方一つ採っても、従来言われてきたような義満の外交イメージは再考の余地がある。こうした義満のアレンジが、彼独特のものであったのか、他の室町殿や、他の時代、国家・政権等においてはどのようなものであったのかが、大きな論点となつてこよう。

（2）唐物の政治文化論

足利将軍家に集積された「唐物（カマロ）」が、どのような政治的イメージを有していたのか、それが結果的にどのような権威や権力を室町殿に付与したのか、という問題をおもに取り扱う。

唐物や唐絵を冊封関係（「日本国王」冊封）と直結させて理解してしまうという従来の研究の難点は、乱暴にまとめると、唐物の優品により、天皇やその伝統的権威のヴェールを圧倒しようとしたという理解にもとづく。だが、アイテムとしての唐物と、現実の国際関係としての冊封関係を短絡させることには無理もあるほか、そもそも伝統的と言われる天皇家の権威や文化すら、室町期には揺れ動いていた。すなわち、いま一度、史料に即して、唐物の国内での扱われ方を明らかにし、政治文化論を再構築していくことが必要であろう。日明貿易やそれ以前に集積された室町殿コレクションの唐物が、どのような中

国イメージを振りまき、為政者層のなかに位置づけられていったのかを探りたい。

3. 研究の方法

(1) 比較外交儀礼論

室町期の日明間における外交儀礼の研究がようやく解明されつつあるとはいえ、実際にはそれはまだ着手されたばかりである。現段階では、さらにそれぞれの儀礼研究を深め、また外交儀礼のサンプルデータを増やしていくことが必要である。

こうした研究を進めるなかで、ようやく、日明間外交儀礼を比較の定点として、対朝鮮使節、対琉球使節に対する外交儀礼の解明を進めることが可能となるだろう。外交儀礼や贈答品、外交文書の詳細な分析について、研究代表者＝橋本もこれまでである程度検討してきたのだが、それを比較史的観点から緻密かつ総合的に探ることが求められる。

また、明代中国の外交儀礼（賓礼）に関する基本史料は、言うまでもなく、正徳年間・万暦年間のそれぞれの『大明会典』であるが、さらにそれを遡る明初の『大明集礼』（朝鮮本：早稲田大学図書館蔵（Web上に全頁掲載））や、あるいは明末に編纂され、具体的な事例が加味されている『礼部志稿』（四庫全書珍本）も非常に重要である。こうした基本史料から外交儀礼関係記事を抽出することが最初の作業である。とくに『礼部志稿』掲載の記事は、『明実録』や『皇明経世文編』などとも突き合わせねばならない。

明代の政治制度が前代のモンゴル元朝から非常に大きな影響を受け、継受している要素が少ないことは兼ねて指摘されている。よって、とくに明初の外交儀礼（賓礼制度）を考察するためには、モンゴル時代の状況を知ることにも必要である。あるいはさらに遡って宋代や隋唐代の賓礼規定との比較も、時間の許す限り、課題として認識しておきたい。

また、朝鮮や琉球の賓礼規定の分析および相互比較も重要なテーマである。近年の朝鮮史では、外交儀礼や外交制度、外交文書に関する研究が進んでおり、そうした成果を参照しつつ、『朝鮮王朝実録』等にみられる冊封・朝貢・遙拝関連の記事を蒐集・分析していくことが可能かつ必要であろう。

他方、琉球王国における外交儀礼（賓礼）規定については、現実の外交儀礼の場面についてはそれほど詳細な研究はなされていないように思う。明朝の冊封使が記した数種の『使琉球録』が主な検討材料となるであろう。明朝からの優遇は朝鮮に次ぐものとされ、琉球王国は、むしろ積極的に明朝中国の国際秩序理念を受け容れていったと見られるが、それを具体的に検証するのが重要な課題となる。

(2) 唐物の政治文化論

先述の通り、この分野は美術史が先駆的な研究成果を挙げている。その成果を批判的に摂取しながら、文献史料との徹底的な突き合わせ作業を行ない、判明する限りの室町殿コレクションのデータベース化を行ないたい。

そしてそれをもとに、コレクションの個別的かつ総合的な把握、その特性や表象性の究明に挑みたい。とくに、所期の目的である、唐物のもつエキゾティシズムが、現実の国際関係とどのように関係するのか（あるいは関係しないのか）、冷静に見極め、政治文化論として昇華させていきたい。

[主な参考文献（研究代表者以外の研究）]

根津美術館・徳川美術館『東山御物』（展覧会図録）1976年；徳川美術館『室町将軍家の至宝を探る』（展覧会図録）2008年；佐藤豊三「将軍家御成について」（1）～（3）（『金鯪叢書』1～3号、1974～76年）；中村秀男「『御物御画目録』の撰者能阿弥に関する一考察」（『東京国立博物館紀要』7号、1962年）；川上貢『日本中世住宅の研究〔新訂〕』（中央公論美術出版、2002年）；畑靖紀「室町時代の南宋院体画に対する認識をめぐって」（『美術史』156冊、2004年）；島尾新「会所と唐物」（『中世の文化と場』東京大学出版会、2006年）；桑野栄治『高麗末期から李朝初期における対明外交儀礼の基礎的研究』（科研費報告書、久留米大学文学部、2004年）；木村拓「15世紀朝鮮王朝の対日本外交における図書使用の意味」（『朝鮮学報』191輯、2004年）；木村拓「17世紀前半朝鮮の対日本外交の変容」（『史学雑誌』116編1号、2007年）；夫馬進編『使琉球録 解題及び研究』榕樹書林、1999年；豊見山和行『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館、2004年。

4. 研究成果

本研究が主たる課題としてきたのは、室町幕府の外交儀礼と唐物文化に関する基礎的な蒐集と検討とである。

研究の成果は、学術論文約10編のほか、一般向けの著書『偽りの外交使節——室町時代の日朝関係』（2012年）および同『日本国王」と勘合貿易』（2013年）に結実し、その成果を広く江湖に問うことができたことと自負している。いずれにおいても、狭義の外交史に閉じこもることなく、表象文化論や政治史、流通経済史などへの架橋を積極的に試みた。

研究課題の前者（（1）比較外交儀礼論）について述べれば、足利義満以下の室町殿（幕府首長）が行なった外交儀礼を、関連史料の厳密なテキストクリティークや、朝鮮・琉球など他国における外交儀礼との比較検討をもとに、ある程度復元することができたと考えている。ただし、全国各地域における明朝中国とのあいだに行なわれた賓礼の研究は不十分に終わり、今後の課題として残さ

れた。前後の時代における東アジア（東ユーラシア）地域の外交儀礼との比較も不十分に終わっており、これも宿題とせざるをえない。

また、研究課題の後者（(2) 唐物の政治文化論）に関しては、生糸や絹織物、書画典籍といった文献史料中の唐物を蒐集したほか、それぞれのもっていた文化的表象性を剔抉することを試みた。最終段階で本格的な検討に入ることができた新しい題材に、「生きた唐物」というべき動植物の輸出入という問題がある。これは、ときに書画典籍以上に雄弁に、国際関係上の優位劣位を物語るアイコンとして位置づけられていた。その背後にある中国古典の「謂れ」を探り当て、研究を積み重ねていくことが今後必須の課題となるだろう。

以上、本研究における外交儀礼論と唐物論とにより、外交史と国内史とを単に短絡させるのでも、またまったく異質のものとして峻別するのでもなく、両者の接点を冷静に見通す縁が得られたといえるのではなかろうか。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

- ① 橋本雄、「室町日本の外交と国家」、『日本史研究』、査読有り、600 号、2012 年、pp.82-110。
- ② Hashimoto, Yu 橋本雄，“Korea in Muromachi culture,” *ACTA ASIATICA*, 査読有り, 103 号、2012 年, pp.23-52。
- ③ 橋本雄、「解説——日本史と世界史とをどうつなげるか」、村井章介『世界史のなかの戦国日本』、査読無し、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2012 年、pp.295-315。
- ④ 橋本雄、「書評：岡本弘道著『琉球王国海上交渉史研究』」、『東洋史研究』、査読有り、70 巻 3 号、2011 年、pp.80-88。
- ⑤ 橋本雄、「北条得宗家の禅宗信仰をめぐって」、西山美香編『古代中世日本の内なる「禅」』（アジア遊学 142）、査読無し、勉誠出版、2011 年、pp.94-111。
- ⑥ 橋本雄、「日本と中国の〈境界〉」、竹田和夫編『古代・中世の境界意識と文化交流』、査読無し、勉誠出版、2011 年、pp.253-264。
- ⑦ 橋本雄、「大蔵経の値段」、『北大史学』、査読有り、50 号、2010 年、pp.1-36。
- ⑧ 橋本雄、「大内氏の唐物贈与と遣明船」、西山美香編『東アジアを結ぶモノ・場』（アジア遊学 132）、査読無し、勉誠出版、2010 年、pp.138-153。
- ⑨ 橋本雄、「対明・対朝鮮貿易と室町幕府-守護体制」、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係 4 倭寇と「日本国王」』、査読無し、吉川弘文館、2010 年、

pp.107-133。

- ⑩ 石田実洋・橋本雄（共著）、「壬生家旧蔵本『宋朝僧捧返牒記』の基礎的考察」、『古文書研究』、査読有り、69 号、2010 年、pp.14-34。

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 3 件）

- ① 橋本雄、『さかのぼり日本史[外交篇]⑦室町 “日本国王” と勘合貿易』、NHK 出版、2013 年（単著）、208p。
- ② 橋本雄、『偽りの外交使節——室町時代の日朝関係』、吉川弘文館、2012 年（単著）、224p。
- ③ 北島万次・孫承喆・村井章介・橋本雄（共編著）、『日朝交流と相克の歴史』、校倉書房、2009 年、396p。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

- ・個人業績集
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fujiwara/bib.hashimoto.html>
- ・テレビ出演・解説・監修
「さかのぼり日本史[外交篇]⑦室町 “日本国王” と勘合貿易」、Eテレ（NHK 教育テレビ）、2012 年 11 月 4 週連続放映（2013 年 1 月再放送）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 雄 (HASHIMOTO, Yu)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50416559

(2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし